

結城紬の原料

結城紬の糸は真綿から引き出しますが、その真綿の原料には繭玉が使用されます。かつては、変形したものや汚れたくず繭と呼ばれるものを使用していました。現在は厳選された繭を原料としています。

大きな窯で繭を煮て、水洗いを繰り返し脱水します。たらいにはったぬるま湯の中で5、6粒の繭を一枚にし、指先で大きく袋状にします。一定の形に整えたあと、室内に干して乾燥させます。結城紬の着物一反分をつくるには、蚕2000匹前後、真綿370~380枚ほどが必要となります。



13 着物

着物に仕立て上げた結城紬は、とても柔らかで暖く、着込むほどに色が冴え、からだになじんでいきます。結城紬は親子3代とも呼ばれ、代々受け継ぐことができる丈夫な着物です。



12 整理作業(糊抜き)

反物を一晩お湯につけ、程良く糊を落としてから脱水し、伸子張りをして屋外で干します。こうすることで、紬本来の風合いを取り戻します。



11 製品(反物)

すべての工程を含むと、簡単な柄でも3か月以上、複雑な柄では1年以上かけて作られるものもあります。



1 糸つむぎ

「つくし」に真綿を巻き付け、手で撚りをかけず、一定の太さで糸を引き出し「おぼけ」にためます。これは世界に例を見ない技法です。



2 管巻き(ポッチあげ)

「おぼけ」に入ったつむぎ糸の集まりをポッチとよびます。このポッチから糸車を使って管に巻き取ります。



3 総あげ

管にとった糸を総あげ機に巻いて輪状にする作業です。これにより糸を一定の長さに束ね、その後の工程での扱いを容易にします。



4 図案作成

図案は布地につける色や模様デザインの設計図で、特殊な方眼紙を使用します。1つの図案から作れる反物は4反ほどで、大量生産されません。



5 整経

経糸をのべ台で往復しながら、所定の長さで本数にそろえ、上糸と下糸を分ける作業です。



6 墨付け

設計図案をもとに拵くりを行う部分に墨で目印をつけます。

結城紬ができるまで



10 地機織り

地機という、原始的な織機で織りあげます。千数百年もの間、今日まで変わらず織り継がれています。



9 下ごしらえ

経糸を機織り機にかけるまでの工程を、総じて「下ごしらえ」といいます。糸は小麦粉を使い糊付けすることで、機織りの際に糸が切れにくくなります。いくつかの工程を経て、最後に織機に取り付けます。



8 染色(たたき染め)

拵くりされた糸を、台にたたきつけて染料を染み込ませさせる、結城紬独特の染色方法です。



7 拵くり

墨付けした部分を、綿糸で一つ一つ縛ります。精巧な模様になると、半年以上の時間を要するものもあります。

結城紬

YUKI TSUMUGI

茨城県結城市を中心に、茨城県・栃木県の鬼怒川流域で主に生産される結城紬。その歴史を辿ります。

遠い古代、三野(美濃)の国の多屋命おほののみことという人が、久慈郡はだごめ機初村(茨城県常陸太田市)に移り住み、織物をはじめました。その織物は長幡部ながはたべとよばれ、その後、常陸国の各地に広まり、結城地方にも伝わりました。また、奈良時代中期に常陸国から朝廷に献上されたあしきぬ紬の一部が、東大寺正倉院に保管されており、これらの紬が結城紬の原点とされています。その後、常陸紬と呼ばれるようになり、鎌倉時代には見た目が質実で丈夫なことから武士にも好まれ、産業として結城の地に根をおろしました。そして、室町時代の頃には結城紬とよばれるようになりました。

江戸時代になり、結城家が越前の国(福井市)に去った後、この地を治めた初代代官、伊奈備前守忠次いなびぜんのかみただつぐは、信州上田(長野県)より職人を招き、染色と拵織りの技術を導入するなど、紬産業の発展に尽力しました。なお、江戸中期に出版された当時の百科事典『和漢三才図説』には、最上品の紬織物として結城紬が紹介されています。

江戸末期にはじめて結城紬に取り入れられた拵模様は、明治時代に花開き、緻密な拵に挑戦するものが次々とあらわれるようになります。明治後期には、拵織の技法ちぢみおりが結城紬に取り入れられ、拵模様を仕組んだ縮織は老若男女に受け入れられ、伝統の平織を凌ぐようになりました。

戦後、生産の回復を見せた結城紬も、緯糸に強い撚り加工をした縮織が全盛で、平織の存続が憂慮されましたが、昭和31年4月24日、結城紬の平織が、国の重要無形文化財に指定され、現在では生産される結城紬の9割以上が平織となっています。なお、結城紬の縮織は、茨城県の無形文化財に指定されています。